

自著を語る：『大連・旅順歴史ガイドマップ』

木之内 誠

拙著『上海歴史ガイドマップ』（1999年6月初版刊）につづく一冊として、本書の制作が始動したのは、上海編の増補改訂版の刊行の見通しがたった2010年のことだった。単著の上海編の続編であったが、本書では4人の共著として計画が始まった。私以外の3人は、かねてより「満洲」地域の文学研究に携わってきた方々であり、早くから幾度かの大連行きを経験を持つ。最も早い時期の大連を知るのは平石淑子さんで、本書後書きの中でも述べられたように、1970年代末頃の貴重かつ稀少な見聞をもっていた。計画始動の翌年には、「旧満州都市歴史地図シリーズ・第一分冊」というタイトルで科研費の申請が通り、本格的な現地調査と文献資料の整理を開始した。以来、出版にこぎつけるのに10年近くかかったことになる。その間、大連、旅順現地へは、各メンバー合わせて延べ30回余り訪れたことになり、私自身が撮影したものだけでも、現地の写真資料はおよそ6千枚に達した。

1. 本書の構成と試み

本書の構成は、次の通りとなっている。

- (1) 地図編（全29図幅）：大連市街16・旅順市街5・金州市街1・広域図4・索引図3、
- (2) 解説編（全281項目・コラム7編）：大連・旅順近代史年表（1840-1955）、
- (3) 参照・関連資料、(4) 索引（約3000項目）

このうち、地図の制作は木之内が担当し、年表の編纂は橋本雄一さんをお願いした。それ以外の解説記事などは、4人が分担して執筆している。

上海、大連と並べてはみても、それぞれの街の歴史と現状に関する情報の蓄積状況の差は、歴然としている。ごくおおまかな推測として、大連・旅順についての各種情報の総量は、上海の半分以下、3分の1程度ではないだろうか。その差は、上海編マップと本書での解説や索引の項目数の差として、端的に現れているともいえる。でも、それに比例して大連篇を中身の薄い本にはしたくなかった。解説篇では1項目あたりの字数が上海編より2倍以上に増えている。また、今回は複数の執筆者がいて、それぞれのちがった角度からの大連・旅順へのアプローチを示すべく、計7篇のコラムを分担して執筆している。

地図本体の制作については、やはり前作の上海編のスタイルが、ひとまずのお手本になったが、当然あらたな変更点も多かった。地図上の文字色については、上海編では、1949年以前を赤字、その後の名称で現在すでに使われていないものを緑字で、現在の名称を黒字で示したが、大連編では、これに紫色の文字を加えて、ロシア統治期の名称にあてた。戦後のソ連との関わりのなかで、1945年と1949年を持つ意味も、上海と大連では自ずと異なったものになっていることなども、作業を進めながら次第に

実感した。地図作りは、いわば自分用の歴史の勉強法になっている。

今回の地図では、立ち並ぶ個々の建物について、建造時期によって3つの色調に色分けして網羅的に疑似3D的に図示し、境界の時代性をわかりやすく可視化することをめざした。ヨーロッパ調の街並みを称えられることも多い大連だが、個別の著名なランドマーク的な建築物は残されても、人々の生活に密着した古い住宅群は、あちこちで惜しげもなく撤去され続けている。鳳鳴街・東関街など、文化財級の住居建築群が近年被った破壊の状況には、そばを通りかかる度に考えこまされるものがあった。暮らしの時の蓄積を膚で感じながら街を歩こうとする人々に、個々の建物の悉皆的な色分け表示を活用してもらいたいと考えた。

上海市街には全くといっていいほど坂道がないのに対して、大連、旅順はともに坂の街でもある。坂道の存在は、街路景観と街歩き体験の欠かせない要素になっている。この路面の傾斜を地図上にわかりやすく示そうとしたのも、今回の新たな試みのひとつだったが、それが効果的だったかどうか、あまり自信はもてていない。

利用者が地図の制作に関与しつつ、開かれた利用形態を認めている地図サイト「Open Street Map」のデータを、本書が地図のベースマップとして利用したことも、ここで述べておくべき事柄のひとつである。知的財産権がいつそう強く主張されていく世界的状況のなかで、地図の著作権についても、図上のあらゆる情報を包括的に独占して囲い込もうとする傾向が見られる。本書掲載地図のコピーライトは、すべて「Open Street Map 協力者」に属するものとして、自由な利用に向けて開かれている。

2. 小さな「発見」とその反響

地図を作ると言ってもその実態はほとんど、既知の事項を地図上に示す作業にすぎず、本書での新たな発見といえるものは、ごくわずかしかなない。しかし、そのわずかの「発見」に、刊行後まもなくして読者の反響が寄せられたのは、著者名利につきる望外の喜びであった。その事例を以下にご紹介し、あわせて地図制作過程の一端としてお伝えしたい。

(1) 大谷光瑞大連別邸「浴日荘」跡地

大谷光瑞が1934年に大連郊外・周水子に建設した別邸「浴日荘」は、その建築の特異な姿とあいまって、当時は大連金州間で名高いランドマークとなっていたことが、当時の観光案内に記されている。だが、すでに現存しないその正確な位置についての記録はなかなか見当たらなかった。竹中憲一氏の『大連歴史散歩』（1997年皓星社刊）には、「古い写真を見ると、浴日荘は三階建てドーム型の風変わりな建物で、空港から少し大連港寄りの小高い丘にあったという」とあるが、地図上に地点を示すには曖昧すぎる。

現地調査で大連に通うようになった当初から、この場所のことは気になっていたが、郊外の周水子周辺まではなかなか調査の足が届かず、また旧地図類にも、市街地はともかく郊外をカバーした詳細な地図は見当たらず、衛星地図の情報からそれらしい場所の候補地はいくつか見つかったものの、最終的に位置を確定するすべがないまま、

地図刊行の予定は迫っていた。

そんな折にたまたま読み返していた林ふき子の
大連紀行『影壁』(1935年、私家版)の一節が目
にとまった(p.131「ワスタンクの様な大谷邸」)。
林ふき子(富貴子 1885-1944)は、1932年から満
鉄総裁を務めた林博太郎の妻として大連に赴き、
大連市街から、遠く関東州一帯まで足繁く訪れ、
その紀行を娘の口を借りた形で書き残している。

その日彼女らは、星ヶ浦の満鉄総裁邸を自家用
車で出発して、甘井子方面に向かった。「星ヶ浦
から甘井子へ行くには、沙河口に出て周水子の
大谷光瑞さんのお家の下の街道を通るのです」車は
周水子付近にさしかかり、丘の麓を通過する。そ
の丘の上にそびえ立っていたのが、浴日荘だった。
一見、鳥籠かガスタンクのような不思議な形をし
た建物で、そこからは湾をはさんで列車の発着す
る大連駅が見渡せたという。そして車は、まもなく右折して甘井子へと向かっていく。
「お兄様は、もう自動車が甘井子の方へ曲がったのも知らずに、夢中になって、大谷
さんの代弁をして居ます。」

改めて手元にある大連の旧地図類を調べなおすと、ごく簡略な付図ながら周水子、
甘井子一帯が収められているものがあつた。満鉄による1913年再版の『大連市街図』
である(図1参照)。林ふき子の紀行からは20年ほど時代を遡った頃の地図であるが、
道路と丘陵がはっきり示されているのが、ここでは役に立つ。

ここで彼女らの車が通った街道筋にあって、浴日荘の所在候補地となりそうなのは、
付図に示したA、Bの二つの丘陵だ。Bの丘の下を通る方が近道のように見えるが、
1930年代当時の道路整備の状況がよくわからないので、一般的な経路としてどのよ
うなルートが選ばれていたのかは、不確かである。東側の埋め立て地を通る、付図に
はない新しい道路を別にすれば、現在の幹線道路は、華北路からAの丘を回り込んで、
すぐまた右折して東緯路に入るコースである。浴日荘の話題で盛り上がっているうち
に、早くも曲がり角を過ぎて甘井子方面に向かっていた、という『影壁』の記述が、
実際の通りだとすれば、Aの丘についてはよく当てはまる状況の描写になるが、Bの
丘では、その付近を通過してからも、はっきりした曲がり角は、1キロ半ほど行った
先まで現れないようである。また、下を通る道路と丘の上との標高差を現在の衛星地
図から読み取ると、Aの丘では30メートル近くになるのに対し、Bではほんの数メー
トルにすぎない。丘の上を見上げるように描かれている紀行文の記事からすると、A
の丘のほうを浴日荘の跡地として軍配を上げたくなった。

こうして当たりを付けたAの丘について、ネット地図の「百度地図」で、該当す
る場所の現状を調べてみると、ここは現在、丘全体が「鼎山公園」というかなり広い

図1 大谷別邸「浴日荘」は何処に



公園になっていた。同じくネット百科の「百度百科」にあたってみると、「鼎山公園」は、「鳥籠山公園」を前身として 1999 年に整備開設されたことが分かった。さらに、1995 年刊行の『簡明大連辞典』で「鳥籠山公園」の項を調べると、1981 年に開設された広さ 10 ヘクタールの公園、とある。開設の以前の来歴は記されておらず、また一方、浴日荘がいつごろ取り壊されたのかも定かではないが、浴日荘がかつてその姿が「鳥籠」にもたとえられていたこととも重なりを見せて、この丘が跡地の本命ではないかと思われてきた。

そして、昨 2018 年秋に龍谷大学で開催された国際シンポジウム「大谷光瑞師の構想と居住空間」において、別府大谷記念館の加藤斗規氏の発表「旅順大谷邸および大連浴日荘」で示された建設当時の雑誌記事から、この推定はほぼ確実と思えるものとなった。「……場所は、大連大広場より九キロ、郊外周水子駅の東南約八百米の地点である」（『大乘』12 巻 12 号、1933 年 12 月「新築中の浴日荘」）。衛星地図サイト上で現在の鼎山公園の中心位置について計測すると、周水子駅の南南東およそ 650 m の地点となって、誤差とみられる範囲で記事の記載と大略合致する。ここで我々の地図上に、自信を持って浴日荘の位置を示すことが可能になった。ご発表から貴重な情報を得させていただいた加藤氏からは、地図の刊行後に、浴日荘の位置の特定についてお尋ねの便りをいただいた。

この夏、短い大連滞在の合間に現地を訪れることができた。かつての「関東州一の眺望」は、周囲のビル群に隠されてもはやしのぶべくもなかったが、円盤状に石畳で舗装された人気のない丘の頂上は、おもいのほか広かった。

(2) ふるさと旅順の旧宅のありか

刊行から 2 ヶ月ほど経ったある日、本書を手にした方から、父君が幼時を過ごした旅順の家の現在の所在を確かめたい、という問い合わせの手紙が届いた。お手紙を寄せられた方の祖父は、当時関東庁に勤務して、旅順ついで大連に在住され、当時の紳士録にもお名前の見える方だった。

しかし旧宅探しの手がかりは多くなかった。旅順新市街の千歳町、その番地まではつきり記憶されている。だが残念ながら旅順については、大連のように詳細な番地入りの地図が残されていない。その方 S さんも、国会図書館まで調べに行っても番地の入った旅順市街の地図は見つけられなかった。そして実際にお父様と旅順現地を訪ね、現地ガイドを伴って旅順の旧千歳町の中心街であった現在の万楽街の通りを尋ね歩いたが、懐かしの家を見つけることはできなかったという。そんな折に、世に出たばかりの私たちの地図本のことを知り、出版社を通して著者に問い合わせの便りを送られたのだった。しかし結局私はそのお返事には、関連の事情をいくらか言い訳のようにご説明するほか、具体的なはかばかしい回答ができなかった。

ご依頼の件の解決にほとんどお役に立てなかったことに、残念な思いをしていたところに、S さんから急転直下の問題解決を伝えるメールが届いた。きっかけは、今は認知症で以前の記憶を失った S 氏のお姉さんが、20 年ほど前に旅順の旧宅を訪れて

いたことがわかり、その時に撮った写真が見つかったことだった。その建物は両端が前に少し突き出たコの字型をしていた。そこで、拙著地図の旧千歳町の範囲内でコの字型の建物をさがしてみたところ、一軒あるのが見つかった(図2参照)。その場所を、以前現地を訪れた時に同行した中国人ガイドに連絡して、改めて現地で調査してもらったところ、住民の話からもかつてのS氏宅であることが確認されたという。はじめの探索が成功しなかったのはその範囲が現在の万楽街の通り沿いに限られていたためであった。

「貴著の地図から千歳街は万楽街だけでなく、もっと広い範囲だったことがわかり、また、家の形を正確に描いていたおかげで、コの字型の家があることがわかりました。貴著が存在しなかったら父は自分の家を見つけることができなかったと思います」というSさんのメールの言葉を読んで、延々と続く手間のかかる作業のなかで、一軒一軒の家の形状まで図示することにどれほどの意味があるのかと幾度も自問しながらできあがった地図が、こうして実際に確かに利用者のお役に立てたことは、ほんとうに嬉しく、労苦が報われた思いだった。

私たちは、かつて科研費の申請書類のなかで、「都市の過去と現在そして未来に対して、さまざまな学問的あるいは実際的な関心を抱く人々と共有しうる、多様な時空景観的情報のプラットフォームの一端を構築することを目論み、…遊歩者のための現場に密着したツールとして、社会的に還元する」と、このプロジェクトの目指すところを開陳していた。それがいまこのように、手に取った方々によって地図が活用され、はじめの大風呂敷が、わずかながらでも実現しつつあることを知るのは、やはり著者の一人として何より喜ぶべきことであり、その委細を手前味噌ながらご紹介をさせていただいた次第である。

重なり合った街の記憶をたどって、我々の道はいまハルビンに続いている。ここはちょっと手強い調査地だ。北辺の冬は厳しく、街をうろつくにも日は短い。さて、すべて転ばぬように気をつけながら、少し先を急がねば。

木之内誠、平石淑子、大久保明男、橋本雄一著『大連、旅順歴史ガイドマップ』大修館書店、2019年4月、201頁。

(きのうち まこと:首都大学東京[2020年度より東京都立大学に改称]人文社会学部)

図2 失われたふるさと旅順の旧宅をさがす



『大連・旅順歴史ガイドマップ』第21図「旅順西北部」より調製